



AAPM2008@Huston, USA

駒澤大学医療健康科学部 馬込 大貴 (2018 年 1 月)

2007 年 4 月九大保健学部 4 年～2013 年 3 月博士後期課程卒業

私は学部、修士、博士課程全てを有村研究室で過ごしましたので、その立場で書かせていただきます。

まず、進学をすると、周りの同級生が減っていきます。自分で選んだ道とはいえ、周りに気軽に相談できる友人が減って行くのは精神的につらいものです。博士課程では3年の秋頃までに英語論文がアクセプトされなければならないというプレッシャーがあります。卒業できるかわからないのに就職先を考えなくてはなりません。それも承知の上で博士課程まで進学したのは、研究が好きだからです。人生の中で研究だけに集中できるのは、博士課程とその後のポストクの時だけです。この期間は非常に幸せでした。

有村研究室の特徴の一つに英語ミーティングがあると思います。私は英語に対して苦手意識があり、学部生の間は全く喋ることができませんでした。修士・博士課程の間に毎週英語ミーティングを繰り返すことで、ポストクとしてアメリカに留学することができました。有村研究室での英語ミーティングの経験が無ければ、留学する勇気はなかったと思います。

また、医学物理や放射線技術分野において大学院進学を考えると、学生として大学院に進学するか、臨床の現場で仕事をしながら研究を行う社会人院生になるかを迷う方がいるかもしれません。個人的には、世界で戦える研究能力を身につけるためには、学生として全ての時間を研究に注ぐ覚悟が必要だと考えています。その成果を証明したいと日々頑張っております。ただ、社会に出ると評価基準は様々であり、同じことをしてもある人には褒められることが別の人には罵倒されるというようなことが良くあります。色々な意見をいただけることは有難いですが、それぞれの人にそれぞれの生き方がありますので、自分の価値観をしっかりと持っていないと何をすべきか良く分からなくなってしまいます。自分の生きる軸ができたのは、研究を通して有村先生にご指導いただき、人生についてしっかり考えることができたからだと思います。

大学院とは、英語論文を書けるようになることは勿論、これからの人生を豊かにするための手段を学ぶことができる場であると思います。研究は一生をかけるほど面白いです。多くの人が大学院に進学し、この分野における“scientist”が増えることを望みます。